

## グリーンとワーズワス

—『ツーリストのための新・湖水地方案内』におけるエコロジーの視点—

### Ecology in *The Tourist's New Guide*

今村 隆 男  
Takao IMAMURA

2003年10月10日受理

1

ベイツ (Jonathan Bate) が『ロマン派のエコロジー』(*Romantic Ecology*) の中でワーズワス (William Wordsworth) のカノンの見直しの一環として注目すべきであると主張した作品の中に、『湖水地方案内』(*Guide to the Lakes*) がある。ベイツは、ワーズワスの作品の中で「他のどの詩よりも常に需要が大きかった」(Moorman 384n) この『湖水地方案内』を、現代のエコロジー的な視点から取り上げ、具体的に5つの点——地域のエコ・システム、建築物の石材、地元民の地域共同体、落葉松の植林、ツーリズムの影響——について言及している (Bate 41-8)。時代性を考慮すれば、ワーズワスがこれらの点に注目したことは画期的であると言わざるを得ない。しかし、結論から先に言えば、ワーズワスはこのような視点の多くをグリーン (William Green) らの先達から学んだ可能性が大きいと思われる。

マンチェスター出身のグリーンは、1800年から湖水地方の中心の町であるアンブルサイドに住み、以降、湖水地方の隅々まで自分の

足で歩き回って詳しく観察し、1819年にその成果を全2巻約1000ページにもわたる大部の著作『ツーリストのための新・湖水地方案内』(*The Tourist's New Guide*) にまとめている。あえてグリーンがタイトルに「新」を付けたのは、湖水地方へのピクチャレスク・ツアーの流行を背景に、それまでに数多くのガイドブックが出版されていたからである。グリーンはその中から、最も人気の高かったウエスト (Thomas West) とギルピン (William Gilpin) を始めとして、ハチンソン (William Hutchinson)、ハウスマン (John Housman)、ラドクリフ (Ann Radcliffe) ら、主だった著者の作品を選んでそこからの少なからぬ数の引用を行いながらも、それらを踏まえた上で独自の主張を展開してオリジナリティのあるガイドブックを書き上げている。

グリーンのガイドブックを彼以前のものと比較してその主な特徴を挙げると、事実を重視し従来のガイドブックと比較しながらできるだけ客観的な記述を心がけている点、眺望重視だったそれまでの記述とは異なり幹線道路 (Turnpike road) から逸れて脇道まで入り込んで細かな観察を行っている点、話題の範

囲は風景だけではなく多岐のツーリストの関心事に渡っている点、個人的な自然観が多く盛り込まれている点、等がある。

中でもグリーンが表明している自然観の中に、ワーズワスに極めて類似した環境保護的思想が認められる点は、大いに注目に値する。そこで本論では、ベイツがワーズワスの『湖水地方案内』に関して言及している上記の5つの問題点を中心に、グリーンの『ツーリストのための新・湖水地方案内』にみられる記述をワーズワスと比較検討することにより、自然描写におけるエコロジー的発想の萌芽がどのあたりにあるのかを明らかにして、これまで殆ど注目されることのなかったグリーン著作の重要性に光を当ててみたい。

## 2

ワーズワスが『湖水地方案内』の第1セクション「湖水地方の景観描写」において、湖水地方の風景美の本質は「多様性」の「調和」であると主張していることを、まずベイツは強調している。ワーズワスが詳説するのは、気象の変化による大気や山々の色彩の「多様性」であるが、グリーンもワーズワス同様、それまでのガイドブックが薦めなかった9、10月を旅行の適切な時期であるとして、雨や雲などが多様で新鮮な山々や大気の表情を生み出すからであるとその理由を説明する(1 10-11)。

ピクチャレスク趣味の絵画的風景美の賞賛とは一線を画したこういった自然の詳細の観察は、自然界のシステムの成り立ちへの目を開かせてくれるものであったと思われる。その一例として挙げられるのは、ワーズワスがウェストラが無視した山上の小湖「ターン」(tarn)を取り上げている件である。ワーズワス

は多様な景観の調和をもたらすものであると審美的な理由で「ターン」を称え、さらに洪水や渇水の時に地域の自然の連鎖の中で「ターン」が果たす役割に言及する。即ち、山々に降り注ぐ雨が山上の「ターン」に貯えられたりしながら谷に降りてくるという循環のシステムになっており、その意味で「ターン」は豪雨の時などに平野が洪水の被害にあうことを防いだり、雨が降らない時でも新鮮な水を平野に供給するという役割を持っているとする(25-8)。ベイツも言うように、自然界の調和に関するこの説明は現代のエコ・システムに値するものであると言ってよいだろう。一方、専ら眺望の紹介に終始した「ウェストは知らなかったであろう」(1 399)という「ターン」にワーズワスに先駆けて随所で言及し、その言葉の語源から紹介する(1 86-7n)グリーンは、2箇所において洪水に呑み込まれる「ターン」の描写をしているが(1 106-7, 1 375)、あくまでも体験的記述に終始しており、地域全体の結び付きを考慮するエコ・システムへの視点は認められない。この点については、ワーズワスはグリーンの記事からヒントを得た可能性はあるが、ワーズワスにエコ・システムの存在を気付かせたのは、彼自身の日常的な自然観察に裏付けられた鋭い洞察力であったと言えるだろう。

## 3

『湖水地方案内』の第2セクション「地域の景観と住民の影響」に関してベイツが取り上げているのは、地域住民の住む建物と彼らの作る共同体の問題である。ワーズワスは、「建物は周囲の風景と調和しなければならない」とし、「建物の色」について「自然の景色と穏やかに一体となる(incorporated)」ことが重要

であると主張して、白などの目立つ色ではなく土地の土壌とできるだけ同じ様な色の石材を使うことが最も好ましいとする。なぜなら、建物と言えども「自然の岩の中から生じて」きたようなものであるのが理想であるからだ(61-4)。ここでは、人間の手によって建てられた家も、山や湖、木々などと同じように、「有機的統一体」を構成する風景内の一対象としてとらえられているのである。

一方、グリーンは昔からの建物が近年になって「モルタルと白漆喰」によって台無しにされていることを嘆き(1 203)、ワーズワス同様、周囲と調和しないという理由で、建物の白い色彩に難色を示している。そして、ウィンダーミア湖のベル島にある建物の色について、次の様に述べる。

The present house is of a tone somewhat too dingy. . . . A tint appropriate to such a house, or to any other in a mountainous district, ought to be a mixture of all the colours of the neighbouring rocks and stones. (1 217)

さらに、そのような建物の周囲の石壁については、

. . . it is less offensive than formerly, when, in despite of all harmonious feeling, it was forced on the eye in a garb as glaring as lime could make it; a few years have, however, lowered and mellowed down that glare, and if the injury is not repeated, it will soon be composed of hues still more according to its neighbouring mountains, woods, and rocks. (1 216)

と主張する。つまり、その「近隣の石材」を

使って作った建物や石壁は、「山々、森、岩」など周囲の自然と調和すると言うのである。人工物も自然と一体となるべきだというグリーンはこの主張は、ほぼワーズワスのそれと同じであると言ってよいだろう。ワーズワスは、さらにここから人間自身も自然の一部にすぎないとする、つまり人間中心的(anthropocentric)ではない——ベイツによれば、ラブロックのガイア説にも通じる——現代にも通用するエコロジカルな主張に至るのであるが、グリーンにはまだそこまでの見解ははっきりとは認められない。

続けて、その土地に産する石材で作った建物は、次の様な理想的な姿に変わって行くのが望ましいとワーズワスは述べている。

These dwellings. . . are. . . rough and uneven in their surface, so that both the coverings and sides of the houses have furnished places of rest for the seeds of lichens, mosses, ferns, and flowers. Hence buildings, which in their very form call to mind the processes of Nature, do thus, clothed in part with a vegetable garb, appear to be received into the bosom of the living principle of things. . . (63)

建物の持つでこぼこの表面は、「コケや羊歯や花」等の植物が種を根付かせる拠り所となり、それらが成長することによって「植物の衣」を着た建物は、「自然のプロセス」を見る人に思い起こさせるとされる。これは、グリーンの次の一節からワーズワスが学んだ可能性が大きい。

The building itself is well formed for the purpose of an artist, and age has given more of interest to

that form, by planting mosses and other vegetables upon it while the hand of time has likewise been judiciously at work with his pencil, his palette being set with all the hues of nature. (1 337)

「鉛筆」や「パレット」等の語が示しているように、グリーンの念頭には未だ風景スケッチが基本にあることは否定できないが、雑草が蔓延る「時間」(“age”、或いは“time” 166)の効果への注目が、ワーズワスの「自然のプロセス」と言う考え方に受け継がれていることは間違いないだろう。

遡れば、このような自然が持つ力への視点は、すでに18世紀末に書かれたプライス(Uvedale Price)の『ピクチャレスク論』(*An Essay on the Picturesque*)の中「廃墟」論の中に読み取れる。

A temple or palace of Grecian architecture in its perfect entire state, and with its surface and colour smooth and even, either in painting or reality is beautiful; in ruin it is picturesque. Observe the process by which time, the great author of such changes, converts a beautiful object into a picturesque one. First, by means of weather stains, partial incrustations, mosses, etc., it at the same time takes off from the uniformity of the surface, and of the colour; that is, given a degree of roughness and variety of tint. Next, the various accidents of weather loosen the stones themselves; they tumble in irregular masses, upon what was perhaps smooth turf or pavement, or nicely trimmed walks and shrubberies; now mixed and overgrown with wild plants and creepers, that crawl over and shoot among the

fallen ruins. Sedums, wall-flowers, and other vegetables that bear drought, find nourishment in the decayed cement from which the stones have been detached: birds convey their food into the chinks, and yew, elder, and other berried plants project from the sides; while the ivy mantles over other parts and crowns the top. (Price 46-49)

廃墟の表面は、「時間と偶然」が施した作用によって変質して崩れてゆくが、そこには「弁慶草」、「イチイ」、「エルダー・フラワー」、「ベリー類」や様々な雑草類が蔓延り、鳥たちが集まって来るとされる。プライスがここで挙げているのは雑草(“rubbish”)の持っている力であり、それが「廃墟」を覆い尽くしてゆく、正に自然のエネルギーがなす「プロセス」を彼は描き出していると言えるだろう。

建物に次いで、ワーズワスが湖水地方の住人のコミュニティを自然と一体となって生活する平等な「羊飼いと農民の完璧な共和国」と呼んでいることにベイツは注目している。ワーズワスは60年前まで湖水地方には一つの理想的な自然と人間との共生社会が存在したと主張し、次の様に述べている。

Towards the head of these Dales was found a perfect Republic of Shepherds and Agriculturists, among whom the plough of each man was confined to the maintenance of his own family, or to the occasional accommodation of his neighbour. . . . The chapel was the only edifice that presided over these dwellings, the supreme head of this pure Commonwealth; the members of which existed in the midst of a powerful empire like an ideal society or an

organized community, whose constitution had been imposed and regulated by the mountains which protected it. (67-8)

この一節は、湖水地方の中でも奥まった場所に位置するウォストデイルに関するグリーンの次のような表現を踏まえたものであることは自明であろう。

Wastdale Head is a narrow, but fruitful vale, and, if ridded of its stone walls, and more profusely planted, would, truly, be a pastoral paradise: all its inhabitants are shepherds, and live at the feet of the most stupendous mountains. . . . (2 242)

続けてグリーンは、地元住民のヨーマンを「牧歌的羊飼い」(“Arcadian shepherd” 2 270)と呼んで、先祖代々その地に住む素朴な人々の、世俗の喧騒(“ever shifting scene of fashionable life”)から逃れ、決して裕福ではないが「独立し」(“independent”)、限りない慈愛の精神を持った彼らを絶賛するが(2 242-71)、この点についても、「純粋な共和国」に住む地元住民の「理想社会」を描く(67-8)ワーズワスとの類似性は明白であろう。そして、両者の描写に共通するのは、彼らがそこでの人間の生活と有機的に結びつけて自然を見ていたことである。つまり、人間と自然との調和が彼らの念頭にあったと言えるのである。

#### 4

ワーズワスは上記のような理想社会が存在したのは60年前までであると言っているが、現状の変化についても二人の意見は一致している。そして、両者が共に牧歌的な羊飼いの共和国の衰退の原因として挙げているのは、

産業革命などの結果起こってきた実利追求の姿勢と、「眺望への渴望」、即ち、ピクチャレスク・ツーリズムの影響である。

グリーンもまた、産業革命がこの地域にもたらした結果について、およそ60年前のグレイ(Thomas Gray)の旅行記に描かれた地元住民の「幸せなる貧困」の生活が崩壊していると、実際の「見捨てられた農場」の見聞に基づいて次の様に嘆いている。

. . . the pedestrian will . . . see a deserted farm house, called the Father Easedale. What a lamentable sight is an uninhabited farm house, where once, in happy poverty, the inmates, not knowing crime, gaily performed their round of duty, who, now banished to towns and wretchedness, may have become the scourge of society, till detached from it by the ocean, or the gallows. (2 145)

幸せな故郷を去った彼らが向かう先は「みじめな都会」なのであり、最後に行きつくのは流刑地か絞首台である。或いは、グリーンは具体的に機織機の影響を取り上げ、ワーズワスがグラマー・スクール時代を過ぎたマーケット・タウンであるホークスヘッドの例を挙げて、次の様に報告する。

. . . the markets at Hawkshead, like those at Ambleside and Broughton, have made but little figure since the invention of spinning by machinery. Formerly all the leisure hours in the country round Kendal were employed in preparations for the loom, and the products brought to market, and there purchased for the

use of that provincial emporium. This created an animated cheerfulness, now lost and almost forgotten; but, shall the introduction of engines for the abridgement of manual labour, tend to the production of individual misery? God forbid! Shall a country blessed with every essential for the happiness of its people and the glory of the state, shrink from the ample means of rendering it the richest, as well as the most powerful, empire on the face of the globe? (1 121)

産業革命による機械化は大英帝国の拡大には貢献するが、地方民の貧しくとも平和で安定した生活はそれにより危機に瀕しているのである。その時代の変化、即ち、牧歌的羊飼いの世界が崩壊して彼らが都会のスラムに流入する様を目の当りにしたグリーンは、ワーズワスと共に自然と住民の「共和国」が失われてゆくのを嘆いているが、これは18世紀後半のピクチャレスク趣味の流行のピークにはそれほど顕著ではなく、19世紀になって加速した流れであったと考えられる。

## 5

一方、ツーリズムの影響に関しては、グリーンはワーズワスほど明確には非難せず、ツーリズムがこの地域にもたらした経済的な効果にも言及しているほどである。しかし、『ツーリストのための新・湖水地方案内』の所々には、眺望を見晴らすかせる高台に建てられた、いわゆる新住民達の別荘への言及が見られ、そういった建物の建設のために、或いはそこからの眺望を確保するために、夥しい数の木々が伐採されたことが指摘されている。第3セクション「変化と悪趣味の影響の防止」において、ワーズワスも近年の新住民の流入と

彼らの建てる家が自然と調和しないことを嘆いているのは、グリーンと同じである。

さらに、森林伐採に関してワーズワスが特に非難するのは、無思慮な植林による景観と生態系の破壊である。ここでも、グリーンとワーズワスの見解は一致する。ワーズワスが病的なまでに批判するのは「落葉松」(larch)の植林であるが(82-90)、この点も彼がグリーンの主張を踏襲していることは明白である。グリーンによる落葉松の植林批判は数え切れないほど多くの箇所にはのぼるが、生態系への観点から重要なのは、グリーンとワーズワス両者が植物(主として木)を「在来の」(グリーンの表現では“native”, “aborigine”)ものと「外来の」(“exotic”, “foreign”, “heterogeneous”)ものとに区別していることであろう。グリーンによれば、湖水地方の「在来種」は「トネリコ」(ash)、「オーク」(oak)、「スズカケ」(sycamore)、「樺」(birch)などであり、「落葉松」や「樅」(fir)などの「外来種」は明確に区別される。

グリーンは、まず湖水地方全体において森林が「容赦ない斧」(“unmerciful axe”)によって大規模に伐採されて(“levelled” 2 23)いる現状を嘆き、利益重視のためその後外来種の木が植林されている現状を激しく批判する。彼の批判の矛先が特に向けられるのは、ワーズワス同様、落葉松である。その主たる理由は、落葉松の大規模な植林が景観を破壊していることである。彼はその木の頂部が鋭く尖っていることを“spike heads” (1 221)と呼び、広範囲に植林されれば“waves of a troubled sea” (1 412)のようだとし、その色は周囲の在来種の“vivid green”とは似ても似つかない“sooty blackness” (1 439)であり、そんなものが植えられれば全く目障りであって

“grievous eye-sores” (2 64)だとまで言う。ほぼ同じ“this spiky tree” (86)という言葉を始めとしてかなり類似した表現を使うワーズワスは、色彩については“a spiritless unvaried yellow” (87)と表現してその単調さを強調し、景観的に周囲と調和しないことが落葉松の植林の最大の問題であると主張するが、グリーンと同様、その論調はかなり感情的であると思われる。

そして、ワーズワスは、「外来種」の植林が持つ問題点の本質は、それが「自然と時間との共同作業」(“joint work of Nature and time” 85)に逆らうことであると語る。自然の森が「時間との共同作業」によって形成されてゆく過程を無視するということは、即ち、現代の我々の表現を使うなら、長い間、環境と調和しながら出来あがった地域の生態系を破壊するというに等しいと言えるだろう。グリーン表現は、景観の調和という論点の域を出ないが、ワーズワスの言う自然の生態系の調和への視点はすぐそこであったと言ってよいだろう。

## 6

ベイツが『湖水地方案内』に関して最後に注目しているのは、ワーズワスがツーリストや別荘を建てる裕福な者達の「趣味」を教育することを念頭においてこのガイドブックを書いている点である。ワーズワスは、湖水地方へのツーリストの集中を避けられないものとして受け入れる代わりに、彼ら一人一人が望ましい「純粋な趣味」(“pure taste”)を持ってくれば、この地は「一種の国民皆の財産」(“a sort of national property” 92)となると述べる。そして、ワーズワスのこの主張が湖水地方でのナショナル・トラスト運動を励ます

力になったことはベイツも論じるところである。

この点についても、グリーンがワーズワスにヒントを与えてくれている。まず、ワーズワスが住んでいた(当時はすでにライダル・マウントに彼は移っていたが)グラスミアが湖水地方の中でもとりわけ美しい地であると主張するグリーンは、その理由を、グラスミアの周囲の土地は所有者が多く、結果的に、一人の大地主が持っていたのなら単調になっていたであろう風景が、極めて多様なものになっているという点を挙げる。

Grasmere is beautiful, but infinitely less so than it would be, if graced by groups and single forests trees of a large growth, not only in the vallies but on the sides of the mountains. — Grasmere is beautiful, but that beauty depends on the multitude of its land owners; for were Grasmere the property of one person, he might exterminate the wood in a spring; but fifty men are seldom in one humour, and the beauty of Grasmere, as far as depends on its woods, is the effect of accident not of design. (1 265)

そして、「偶然の効果」を強調するグリーンは地主達に「真の趣味」(“true taste”)を持って景観を守るようにと提言する(1 265-6)。一人の所有者が一時期に同じ種類の木を一面に人工的に植林する場合とは異なり、多様な風景は人の手の加わらない「偶然」(“accident”)が作り上げるから美しいとするグリーンの主張は、自然のエネルギーの力を尊重したプライスの考え方に沿ったものであろう。ワーズワスのエコロジカルな自然への目は、すでにプライスとグリーンを通して準備されていた

と言えるのである。

## 7

さて、これまでワーズワスの『湖水地方案内』における注目すべき自然観と比較しながら、グリーンのガイドブックの記述を検討してきたが、最後に、この『ツーリストのための新・湖水地方案内』における主張の中から、ワーズワスには見当たらない、特筆すべきグリーンの論点を挙げてみたい。それは、この長いガイドブックの最後に置かれている土地の利用計画の提案である(2483-507)。グリーンは、ケジック郊外にあるグリニッジ病院の所有する土地の変わり果てた姿を嘆き、ピクチャレスク時代に一世を風靡した庭師ケイパビリティ・ブラウンのよく使った言葉を恐らくは意図的に用いて、そこを「改良」(“improvement”)することを提案するが、その内容は20世紀の「田園都市構想」にも匹敵するものであると思われる。

その提案は、地域住民、ツーリスト、地主である病院の三者共の利益になることを念頭においたもので、費用は出資者を募っての共同出資とし、予算は極めて詳細に考えられており、その資金によって新しい村を建設し、教会やアメニティ・センターのようなものを作り、その周囲には森や小道を整備し、物資の輸送や観光のための運河を張り巡らすという大規模なものである。大きな窓の明るい家を建てて、同時に貧富の格差を少しでも小さくするために窓にかかる現行の税金の徴収方法を変更する、コストを安く上げるためにも地元で取れた石材を使う、など細部についても詳しく計画されており、林の中にシェルターとなる建物を造る、伐採を監視するために森に番人を置く、酔っ払いから女性を守る

為にティー・ガーデンを作る、といったことまでが提案されている。これは、まさに20世紀にロンドン郊外のレッチワースなどで実現した田園都市構想の原型であると言ってよいだろう。

結局、この土地はグリーン死後の1832年に人手に渡り、グリーン提案が実現することにはなかった。それを書簡(Letters 494)の中で悲しんだことがわかっているワーズワスは、自らも眠ることになるグラスミアの教会墓地に建ったグリーン墓碑の銘を書いているが、ワーズワスが多くをグリーンから学んだことは両者のガイドブックを比較すれば明らかであろう。ワーズワスの著作にはグリーンのような田園都市構想はみられないが、『湖水地方案内』は、見方によれば、この地域全体に向けた大きな田園公園構想とでも言うべきものであり、半世紀のちに、その構想はナショナル・トラストによって実現されてゆくことになる。

本論で取り上げた点以外にも、グリーン『ツーリストのための新・湖水地方案内』には、他のガイドブックにはあまり見当たらない特筆すべき内容——地名の語源、各町の詳細な歴史、鉾山の状況、レクリエーションなどの催し、温泉の紹介、強盗事件、各々の住民の所有する羊の具体数から、幽霊談に至るまで興味深い話題——が数多い。グリーンがこの著作は、18世紀に流行した湖水地方をめぐるツーリストのためのガイドブックの集大成であると同時に、ワーズワスの著作ほどには自然のシステムに対する大局的な目を持ってはいなかったとは言え、新しい時代のガイドブックへの橋渡しとなる画期的な作品であったと言える。



参考文献：

Bate, Jouathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. London: Routledge, 1991.

Green, William. *The Tourist's New Guide, Containing a Description of the Lakes, Mountains, and Scenery, in Cumberland, Westmorland, and Lancashire, with Some Account of their Bordering Towns and Villages*. Kendal: R. Lough, 1819.

Price, Uvedale. *An Essay on the Picturesque, as Compared with the Sublime and the Beautiful; and, on the Use of Studying Pictures, for the Purpose of Improving Real Landscape*. London: J. Robson, 1794.

Wordsworth, William. *Guide to the Lakes*. The Fifth Edition. Ed. E. de Selincourt. 1835. Oxford: Oxford Univ. Pr., 1977.

*The Letters of William and Dorothy Wordsworth, 1829-1834*. Ed. E. de Selincourt. 2nd Ed. Oxford: At the Clarendon Press, 1967.

IMAMURA I